

本を選ぶ

高校図書館版

NO.65 2018年(平成30年)5月20日
<http://www.las2005.com>

●発行/ライブラリー・アド・サービス
〒335-0004 埼玉県蕨市中央5-20-1 TEL=048-432-3726

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

何度も何度も、繰り返し、繰り返し

溝上 牧子

あなたは本が好き？ それとも嫌い？ そんなことを私が人に聞くことはほとんどない。しかし、読んだ本が面白かったときにその本の話のできる仲間がいたら楽しいだろうなあ時々思う。

中学・高校時代の私は、コバルト文庫を読み、赤川次郎や星新一を読み、音楽雑誌や、アイドル雑誌、好きなバンドの写真集なんかを予約して買ったりするどこにでもいる普通の学生だった。

一口に本といっても、人それぞれの本との付き合い方があるだろう。枕にしたり(?)、入睡剤的に(?)、面白いから、勉強のため、勧められたから、話題だから…といろんな本との出会い方を人はするんだろうと思う。本といったって小説だって、地図だって、ゲームの攻略本だって、マンガだって、教科書だって本なのだ。

まだ甥っ子が保育園に通っていたころのこと。たぶん来年は小学生になるという年だったと思う。年のわりに言葉はかなりたどたどしいが、ファミコンをすると、めっぽう強く、機械音痴、ゲーム音痴の私は彼との対戦にすぐに負けた。ある日ゲームの攻略本を熱心に見ている彼がいた。そうか、そうやって腕を磨いていたのか。字もろくに読め

なかったころの彼はその時どの程度その攻略本を理解していたらだろうか。

活発で人懐っこいお兄ちゃんとは反対の彼。人を笑わせるようなユーモアもある一方、集中力もなく、ほとんどやる気も見せない、マイペースでぼーっとした彼が夢中で攻略本を読んでいる。今だにその光景を思い出すのはあまりにもいつもの彼とのギャップが大きかったからだろう。小学生時代お兄ちゃん是要領の良く、頭もよかったが、弟の彼は要領も悪く成績もそんなに伸びなかった。しかし、中学、高校と進むうち彼はめきめきと成績を伸ばしていったのだ。ゲームの攻略本なんて良い本、悪い本と区分けするなら、いいほうには数えられないだろう。

それでもその攻略本を図と絵をみながら、すぐにはわからないまでも一つ一つそれを理解しようと熱心に読み込んでいった子ども時代の彼。好きなことで人は集中し成長するんだなと思った。

分らないことも繰り返し繰り返し読んでいううちに理解する。または今読んだ本を何年か後に読んだら違うところがずっと心に入ってくることもある。だから再読は楽しいのだ。本を読むのが苦手な人に本を読めとは言わないが、好きな本が一冊でも見つかったらいいねとは思う。その好きな本はきっとあなたにとって生涯大切なものになるんじゃないだろうか。私は心がざわつくとき、元気がないときに好きな本を再読する。一人自分と向かい合って好きな本を読んでいると、なんだかいいんだよなあ。多読でなく、再読のススメである。(みぞかみ まきこ:朔北社)

「東京・学校図書館スタンプラリー」～“学校図書館をひらく”とは～

東京都の中学・高校の学校図書館で「東京・学校図書館スタンプラリー」が毎年開催されています。夏休みの期間中、学校図書館を一般向けに公開するイベントで、今夏は第7回目を数えるそうです。第4回目から実行委員長を務められる杉山和芳さんを東京都立国分寺高校(前任校)に訪ね、お話をうかがいました。

「スタンプラリー」のはじまり

「東京・学校図書館スタンプラリー」が初めて開催されたのは、2012年。その数年前に、大阪で「高等学校図書館フェスタ in 大阪」、埼玉で「埼玉県高校図書館フェスティバル」といったイベントが行われ、盛況だったことなどに刺激を受け、学校図書館問題研究会東京支部に参加する公立・私立の学校司書や専任司書教諭の方々から「東京でもぜひ」と声が上がったのだそうです。

いろいろな学校図書館を見てもらえるように、スタンプラリーという形式で夏休みに開催すると、その先駆的な活動に注目が集まり、初回から多くの参加者が集まったとか。

昨年度の第6回では、図書館を公開する参加校は初回の13校から31校に増え、スタンプラリーの参加者も189名から865名へと増加したと聞き、招く側と訪ねる側の双方で学校図書館に関心が高まっていると感じました。

「スタンプラリー」で学校図書館をひらく

学校図書館は、基本的にはその学校に通う生徒と教職員たちのためのものであり、ある意味とても閉じた存在であると杉山さんはおっしゃいます。それを広く公開し、自由に見学できる機会として「スタンプラリー」を開催され、どんな意義があったのでしょうか？

夏休みの開催期間内に、参加校はそれぞれ独自に決めた日程で公開するそうですが、受験生に向けた「学校説明会」に合わせた学校が多いそうです。受験を控える小・中学生にとっては、「図書館を見ると学校がわかる？」というイベントのキャッチコピーの通り、その学校に進学したいか否かの判断材

料として大いに役立っているようです。

そうした、スタンプラリー本来の対象者である小・中学生に加え、図書館関係者の方々も多く参加されると聞き、興味深く思いました。小・中・高等学校の学校司書や司書教諭、公共図書館の児童・青少年サービスの担当者等の方々が、普段は見る事が出来ない中・高の学校図書館を熱心に回られているそうです。

都立高校の学校図書館では、近年は東京都で雇用された司書の新規採用を行わず、業務委託は進むばかりとのこと。280名ほどいた正規の司書が70名ほどに減ってしまったそうです。そうした中で、委託業者が雇用する司書に研修の場としてスタンプラリーを紹介している例もあるそうで、委託の司書が経験豊かな司書の図書館を訪問し、業務を目の当たりに出来る機会はとても貴重だと思いました。

参加校の試み

スタンプラリーでは、参加校で構成される実行委員会を中心となり、活動を進めていらっしゃいます。学校図書館を見て回るときに使用するスタンプラリー・カードや、図書館を訪問するともらえる「小中学生におすすめの本」というブックガイド小冊子や「しおり」などを毎年作っていて、特にブックガイドは「日本十進分類法」の分類番号順に0類から9類まで網羅するように本が紹介された読み応えのあるものです。このブックガイドは、過去5回分が『学校図書館の司書が選ぶ小中高生におすすめの本300』(ペリかん社/2017年)にまとめられ、さらに第2弾も計画中だとか。イベントによってつながった、学校図書館の司書や司書教諭の方々の「図書館にいらっしゃい。おすすめの本がたくさんあるよ」という思いが、1冊の本に結実するなんて素敵ですね。

そして個々の学校でも、見学に来られた方々に向けてイベントを開催されています。昨年のチラシからも、「ブックトーク」や「ビブリオバトル」、本の

企画展示、「和綴じ本作り」、「ヒンメリ(北欧のモビール)作り」など、各校の司書さん方が図書委員の生徒たちを巻き込んで、楽しい企画を準備されたことが見て取れます。杉山さんがいらした国分寺高校では、そのイベントを国分寺市の図書館・公民館、広報などで告知したことで、地域の親子に多く集まってもらえたということでした。

中にはイベント開催は苦手とか難しいという司書もいらっしゃるようですが、学校以外の方には普段「閉じている」学校図書館が、地域に向けて「開く」ということで得るものがあると杉山さんは力強くおっしゃいました。また、お客さまを迎える手伝いを担った中高生の図書委員にとっても、スタンプラリーに参加した親子などとのコミュニケーション等は、普段学校に通うだけでは経験できないことなので、とても意義のあることだと語ってくれました。

「スタンプラリー」のこれから

学校図書館が広く公開され、ほかの学校図書館との連携も得たことで、様々な相乗効果が生まれているそうです。スタンプラリーで見学し、その学校に入学した中高生が、図書委員になって積極的に図書館活動に携わってくれたり、他校の取り組みを学んだ司書さんが自校の図書館運営に活かしたり、先生方の中で学校図書館の存在意義が再認識されたことで授業などでの図書館の活用が増えたりと、学校図書館の活性化が広がっているのです。学校図書館を「開く」ことは、「拓く」ことにつながると聞きました。

最近では、東京以外でも司書さんのネットワークで楽しい試みが催されているそうです。埼玉の高校図書館と地元の公立図書館や書店がタッグを組んだ「イチオシ本フェア」も、回を重ねているとか。「地方でも、単独でも、図書館は“ひらく”ことが出来ます」との杉山さんの言葉に、勇気をもらおう方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

「東京・学校図書館スタンプラリー」は、今年も参加校の募集が始まっています。恒例となった若手作家の講演会(聴講は中高生限定!)も、既に講師役が決まっているそうです。私立・公立の垣根もなく、司書と司書教諭の方々がひとつとなって取り組まれている活動が、今後どのように発展していくの

かとても楽しみです。

詳細は、随時ホームページなどで公開されていますので、ぜひスタンプラリーにご参加ください。

<http://tokyohslib.ehoh.net/>



2017年 スタンプラリーポスター

【おまけ】杉山先生の日課ご紹介

スタンプラリーのお話をうかがいにお訪ねしたのですが、杉山先生が図書館作りのために日々心掛けていらっしゃることも興味深く、少しご紹介します。



2017年 ブックガイド小冊子

図書室で目を引いたのは、映画のチラシとその映画の原作本がペアになって、何組も面陳されているコーナー。毎週、情報やチラシを入手するために地元の映画館に通われているのだそうです。また、図書館に通じる廊下壁面には、展覧会のポスターがずらりと並び、そのチラシと割引券が専用ラックに並んでいました。高校生にぜひ見てもらいたいと思うような企画展を見つけたら、美術館や博物館に連絡をし、扨材を直接送ってもらっているのだとか。生徒たちの好奇心をくすぐるために常に情報収集を行い、工夫されているのですね。

また、毎月80~100冊購入されるという新刊の選書のために、多くの情報を定期的にチェックされていると伺いました。毎日、総合書籍WEBサイト [honto](http://honto.jp) の新刊情報と新聞5紙の書籍広告を確認され、週1回は書店の陳列棚をご覧になっているそうです。さらに発注の前には、いくつかのWEBサイトを参考に絞り込みをされるということでした。

そんな風に奔走される毎日ですが、生徒たちに「先生、暇そうだなあ」と声をかけてもらったら「最高!」なのだとか。そこから何気ないおしゃべりが始まって、最近読んだ本の感想なんて聴けたらいいですね!

杉山先生、ありがとうございました。新任校は、中高一貫の東京都立南多摩中等教育学校とのこと、更なるご活躍を祈念いたします。(LAS 探検隊)

絵本解放宣言！？

～『13歳からの絵本ガイド YAのための100冊』～

岡村 瞳子

漫画もいいけど絵本もね

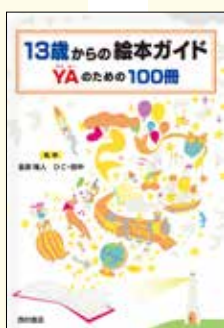
市の図書室で働いている。蔵書1万3千冊程度の小さな室だ。常連さんが多いが、その中でも開室したての時間によく現れる10代後半の女の子がいる。そのまま半日。その場所ですっと漫画を読んでいて、気づくといなくなっている。放っておいて欲しいのだろうな、と承知しているけれど、同じ場所にやってきて、それほど多くない数の漫画を繰り返し読む様子はやっぱり気になる。「漫画だけじゃなくて面白い本が棚にいっぱいあるよ。もしかしたら、あなたの中の歯車のかみ合わせが、ちょっと変わるかもしれない。絵本なんてどう？ なかなかいいよ、深いよ！」と念を送っているが、いまだ通じていない。

漫画と絵本。私はどちらも大好きだ。特に絵本は、限られたページの中で文と絵がそれぞれ独立しながら「仲良く手を取って、あるいは激しく反発しあって、あるいはお互い関係のなさそうな振りをして、ひとつの世界を創り上げている」ことが魅力だ。それは漫画とも小説とも違う面白さがある。そして、それぞれ読んだ人の心の中で生まれる余韻は十人十色。言葉を覚えたての子どもではできない絵本の楽しみ方だろう。それが彼女に絵本を薦めて(念じて)いる理由の一つでもある。

絵本、YA、学校、それから図書館

最近では高校でも絵本の読み聞かせを行ったり、授業で扱ったりすることもあると聞き、驚いた。国語の授業で、絵本を読むこともあるそうだ。子ども扱いするな、と引かれてしまうのではないかと危惧してしまうが、読解に正解を持たせない自由さが良いのかもしれない。そして絵本には百の言葉がけよりも、心にすんなり届く力があるものだ。他の学校では、自分たちが我が子を育てるときに読み聞かせ

できるようにと、お話し会の人を学校に呼んで絵本の読み聞かせをしているケースもある。また家庭科の子育てという単元の授業の一環で、赤ちゃんと直接触れ合い、赤ちゃんに絵本を読んであげる時間を設けている学校もある。司書の方と連携して、関連の絵本が図書館に並んでいるようだ。その学校では先生も個人的に図書館を訪れる機会が多く、本を通じて生徒達と教室とは違う会話が生まれている、という話も興味深い。



『13歳からの絵本ガイド-YAのための100冊-』金原瑞人／ひこ・田中 監修／四六判並製・オールカラー／240ページ／2018年4月西村書店刊

とはいうものの、絵本選びは難しい。先日小学校の読み聞かせボランティアの勉強会で、文庫も運営しているベテランのお母さんが、新しく入った方々に読み聞かせのデモンストレーションを行った。その帰り、「あの人が読んだ絵本、ぜんっぜん面白くなかったね～」と若いお母さん方が話しているのを背中越しに聞き、ヒヤリとした。いわんや高校生をや、である。

絵本への熱い思い

そんな折りに、今年4月に刊行された『13歳からの絵本ガイド YAのための100冊』という本を見つけた。監修者の一人である金原瑞人氏の「若者や大人こそ楽しめる絵本はたくさんある。絵本を児童書のコーナーに閉じ込めておくのはもったいない。もっとたくさんの人に読んでほしい」という言葉に、私ははげまされ、参考にしている。ここで紹介されている100冊を、全て知っているわけではないけれど、教訓めいた明らかな暗示(?)がない本が多く、そういうニオイに敏感なYAさん達に向いていると思う。むしろ、シニカルに笑い飛ばしていたり、「え？ここでおしまい？」とバツサリ終わっていたり。その辛辣さやハテナを挿画が補っていて、読者に冷たい印象を与えない。メッセージ性が高くてもさりげなくて、読者と対等なのだ。投げた小石が池に落ち、小さ

な波紋を広げてずっと消えるような、純粹でシンプルな読後感もある。見開き右側には表紙が載っているが、どの本達もなかなかいい面構えだ。選者も翻訳家から児童文学作家、編集者、大学非常勤講師、書店員、主婦ブロガーと多様で、刊年も『はなのすきなうし』（マンロー・リーフ作 1954年）のように昔から親しまれてきたなつかしい王道の本から、『あるかしら書店』（ヨシタケシンスケ作 2017年）など最近話題の作家によるものまで、幅広い。「十代の人にこそふさわしい作品も山のようにあるにもかかわらず、その情報にたどり着くのは難しく、なかなか気づいてもらえませぬ。そこが悔しい」とは、もう一人の監修者であ

る、ひこ・田中氏。「とにかく多くの人に絵本を読んでもほしい！絵本を手にとってほしい！100冊選んだから、みてみて！！」という絵本への熱い思いが伝わってくる。どの絵本も読んでみたくなるが、この一冊を読むと、絵本を100冊つまみ食いして読んだような満腹感も味わえる。そして本物の絵本に出会ったときに、必ず「あ、いた！」と嬉しくて手に取ってしまうだろう。絵本を選ぶ機会がある方々に、ぜひ読んでいただきたい。そして道端の小石みたいに、そおと絵本を何か一つ、書架にしのばせてみてほしい。若い人たちが、ふっと手に取ってくれることを念じながら。

（おかむら とうこ：市立図書室勤務）